

---

3月11日(5)

(森安章人、SOS! 500人を救え! 3・11 石巻市立病院の5日間、2013、p.55-66)

2014年9月5日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

この本は、医師である筆者が記した3・11から5日間の石巻市立病院での記録をもとにまとめられたものである。津波にのみこまれ、全電源を喪失する中、500人近くの入院患者・地域の避難者・スタッフとともにDMATが奇跡の救出を実現するまでのドキュメントである。

・悲劇

回診後、アパートの屋上に、女性が降りしきる雪の中で耐えているのが病院内から見えた。流されている車の中の人とは違い、助かる命だと思い病院内に連れ帰った。筆者はその時は助かってよかったと思ったが、その女性は子供が車の中に取り残され、目の前で津波にのまれて助けることができなかつたため、院内に連れてこられても外に出ていこうとしたと後で知った。同じく子供を持つ親として、その気持ちを考えると言葉を失った。

・暗闇の中

午後5時になると、陽が落ちて院内は真っ暗になった。患者は従来通りの治療が続けられたが、院内にはスタッフと避難者が患者の約3倍いて、この人達の居場所がなかった。水や食料は十分な量がなく、情報源はラジオしかなかった。家族の安否も分からず、真っ暗な建物の中に閉じ込められ、皆無口であった。余震も日が暮れるころにはさほど気にならなくなり、誰も作業の手を止めることはしなかった。

・寝ずの番

点滴調整は震災前と変わりなく行わなければならないため、指示内容を2人1組で確認しながら行った。ナースコールは停電で使えないため、患者の呼ぶ声が聞こえるように、2人1組の割合で、動けない人のいる部屋の前に椅子を置いて、夜勤者はそこに座って寝ずの番をすることにした。夜勤看護師だけでは、全病室をカバーできないので、NIC事務職員や医事課職員で昼に仮眠が取れる者も、寝ずの番に自発的に参加した。

・アルミシート

午後8時30分、第1回の全体ミーティングで、院長より今の窮状が説明された。何の方向性もないこの時点では、ただ生き延びることだけを考えていたせい、意外と絶望感はなかった。午後9時になり、夜が更けると少し寒さを感じるようになった。外来化学療法

室から副師長が持ってきた保温用アルミシートは、床に直接座っていた筆者には大変ありがたいものとなった。

#### ・溶けたアイス

夕方、看護師達はそれぞれのロッカーから食べられそうなものを全て集め、避難者や患者を優先して、夕食の代わりにと配布した。その結果、配ることのできなかつた「溶けたアイスクリーム」を筆者は看護師から貰った。皆普通に振る舞っているが、スタッフの誰もが被災者だった。家族の安否などの心配事があるにもかかわらず、それを表に出さぬよう極力明るく振る舞っていた。誰も一言も家族のことなど口にせず、「辛い」「苦しい」という言葉は、脱出するまでの5日間、一度も耳にすることはなかった。

#### ・圏外

午後10時、日勤者は仮眠のため横になれる場所へ、夜勤者は各病室前に置かれた椅子へと移動した。筆者も少し休むことにした。妻と息子のことが気になったが、携帯は圏外のままだった。携帯を操作している看護師からため息が聞こえ、鼻水をすすりあげる音がした。人前では明るく気丈に振る舞っている彼女たちも、家族のことが何よりも心配なのだ。筆者自身もそうだし、皆個人に戻ると一刻も早く家族のもとへ帰りたい、安否を知りたいと考えてしまう。それも当然のことだろう。

#### ・偶然の通話

午後10時を少し過ぎた頃、筆者がナースステーションに戻ると、急に慌ただしくなっていた。医事課職員の携帯が一時圏外ではなくなったので、市役所に電話を入れたところ、偶然つながったため、本部の指示通り、患者のリストを作った。しかし、市役所との通信はそれっきりで、どうやらまったくの偶然だったようだ。その後、連絡は途絶えた。筆者は眠ったかどうか分からぬまま、ひたすら夜が明けるのを待った。

#### 考察

目の前の家族を助けることができず、自分だけ助かることになった避難者の気持ちを考えるといたたまれなくなる。しかし、医療従事者として、助かる命は助けなくてはならないと思うのは当然のことであろう。

また、医療従事者も自身の家族の安否が気になるが、目の前の患者・避難者を助けることに精一杯になり、明るく気丈に振る舞うという心構えは見習わなければならないと思った。

全電源を喪失した中、工夫を凝らして医療を行えたのは、日頃の訓練があったからであろう。災害時に対する訓練を行い、冷静に対応できるようにならなければならないと思った。